

私事ですが、長女が大学受験、真っ最中です。本人はいたってのんき(…に見えるだけ?)なので、結果はどうあれ、親の私たちも温かく見守っていかうと思っています。

私自身のことで言えば、高校受験では、中学から同級生5人で同じ高校を受験して、私一人が不合格という苦い経験を、大学受験では、当初の志望であった工業デザイン系の大学に3度も失敗して、2浪の末、これまた滑り止めだった、まったく方向違いの福祉系の私立大学へ行くことになりました。

どちらも当時の私にとっては、つらい体験でしたが、ふり返ってみると、そのおかげで出会えたかけがえのない友人、恩人がたくさんいますし、大学で妻と出会い、結婚して二人の娘を授かり、今の家庭を築くことができました。そして、今、保育というやりがいのある仕事に携わることができていることも、とても幸せに感じています。何度も受験に失敗したのは苦い経験でしたが、それが今となっては返って良かったと思えるのです。人生、何が災いして、何が幸いするのかわかりませんよね。

昔から「かわいい子には旅をさせよ」とか、「獅子の子落とし」「親の甘いは子に毒薬」などと言われてきましたが、あえて、「わが子に試練を与えよう」とはなかなか思えませんよね。しかし、大人がなんでもかんでも先回りして、出来ることなら子どもが試練を避けて通れるようにと、子どもを過保護に育ててしまったり、過干渉になったりすることは避けたいものです。

私たちが子どもに育てたい力は、いろいろなものがありますが、突き詰めていくと、「乗り越える力」なのかもしれないと思います。親なら誰しも、子どもが「痛い思いをしないように」「いやな思いをしないように」「恥ずかしい思いをしないように」「傷つかないように」「つらい思いをしないように」「苦しい思いをしないように」…と考えるのは当たり前かもしれません。しかし、だからといって、なんでもかんでも大人がお膳立てして、子どもを試練から遠ざけてしまうのではなく、子どもに試練が訪れるのは「避けられないもの」として、むしろ、「少しぐらいの試練は良い経験」と捉えて、いずれ、もっと大きな、どんな試練がやってきたとしても、そこで子どもが絶望することなく、工夫したり、努力したり、誰かに相談したり、上手に気分転換をしたり、考え方を変えたりして、「どんな状況であっても、希望を失わずに何とか乗り越えようとする力」を育てていきたいものです。

でも、やっぱりそのためには、「心のよりどころ」が大切です。自分のことを温かく見守ってくれる誰かがいるという安心感。これによって、子どもは新しい世界へ出てみようと思えるのです。いざとなったら、いつでも帰れる場所があるからこそ、外の世界へ出かけられるものなのです。親も覚悟を決めて「この子なら、きっと大丈夫。私たちの子どもだもの。これぐらいの試練はきっと乗り越えられるはず。」と子どもを信じてやることも大切です。

ちょっと余談ですが、「信じる」という言葉は「相手に期待する」ものではなく、「自分の覚悟」です。期待は裏切られることもあるけど、信じるかどうかは自分の覚悟なので、裏切られるという類のものではないのです。だから、子どもに期待するよりも、子どもを信じてやる。過度な期待は子どもにとってプレッシャーになることもありますが、絶対的な信頼は安心感につながるものだと思うのです。

大切なのは、親は親、子どもは子ども。「子どもの人生の主人公は子ども自身である」ということです。もちろん、親である私たちの人生の主人公も私たち自身でなくてはなりません。

親として子どもにすべきことが何なのか、時々ふり返って考えてみたいものです。